

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

物質の世界をかき分けて〈共同研究：モビリティと物質性の人類学〉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2023-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古川, 不可知 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000019

物質の世界をかき分けて

古川 不可知

本共同研究の目的は、人びとの移動とそれに伴う物質的な側面を世界各地の個別具体的な民族誌事例に基づいて比較検討することであった。多様な文化や地勢のもと、どのような事物や構造が人びとの移動を促し、介在し、また妨げているのだろうか。いわゆるグローバル化が進行する現在、しばしば移動の経験を均質化してゆくように考えられている近代的なインフラは、世界各地の人びとにいかなる影響を及ぼしているのだろうか。

2019年10月に開始した若手共同研究「モビリティと物質性の人類学」は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う延長を含めた3年半の期間に13回の研究会を開催した。本研究会に集った若手人類学者たちは、自らも現地の人びとと移動をとともにすることを基本的な方法論としてデータを収集し、議論を重ねてきた。また2021年3月にクオアチア（オンライン）で開催されたIUAES Congress 2020や2021年5月の日本文化人類学会第55回研究大会では分科会を組織し、成果発信や国内外の研究者との意見交換にも努めてきた。

移動することの多様性と変化

まず明らかになったのは当初の仮説のとおり、グローバルな移動のネットワークとの接続が単純に従来の移動のやり方を駆逐するのではなく、移動をめぐる既存の実践や観念と混ざり合いながら独自の变化を遂げてゆくことであった。ヒマラヤやアフリカ、カリブ海域など、地球上のさまざまな場所に到達した「近代的」なインフラや装置は現地の文脈のなか

で読み替えられ、たとえばネパール山間部では車道そのものが発展と見なされるというように、それぞれ異なった思考や新たな実践を駆動してゆくのである。

移動することと滞留すること

奇しくも本研究が開始して間もなく、新型コロナウイルス感染症の流行によって移動をめぐる光景は一変した。少なくとも日本の文脈では、自由で恵まれた者の営みであった移動は「不届きな」行為となる一方、宅配業者などそれでも移動せざるを得ない人びとの苦境が際立たせられることにもなった。私たち自身もまた予定されていた調査を中止し、顔を合わせることなくオンラインで議論を続けることとなった。それまで当たり前のものであった私たちを取り巻いていた移動の意味や実践も目の前で読み替えられ、変化していったのである。

だがこうした状況は、私たちの研究に新たな洞察をもたらすものでもあった。いかなる力が移動や滞留を促すのか、あるいは移動することに対して留まることはどのように意味づけられているのだろうか。大地に引かれた仮想の線に過ぎない国境は、移民や難民となった人びとにとってときに巨大な山脈以上に乗り越えがたいものであり、私たちがコロナ下においてそのことをいささかなりとも実感することになった。またインドの遊牧民や日本の「バンライフラー」、あるいはメラネシアにおける移動の観念やデンマークにおける芸術実践の検討からは、そもそも移動と滞留という二分法的な認識自体が仮構に過ぎない可能性にも思いいたらされることになった。



ラオス・ルアンナムター県の流れ橋 (2016年3月、ラオス、難波美芸撮影)



ヒマラヤを歩き交う人・車両・動物 (2023年3月、ネパール、古川不可知撮影)

古川 不可知（ふるかわ ふかち）

九州大学大学院比較社会文化研究院講師。専門は文化人類学、ヒマラヤ地域研究。著書に『「シェルパ」と道の人類学』（亜紀書房 2020年）などがある。

移動することと質感

移動することはさまざまな質感を伴う実践である。たとえばケニアの自転車選手は熟練するにつれて世界は滑らかで「ラウンド」なものに感じられるようになってと述べる。他方でヒマラヤの斜面を運転するためには、歩くときと同様に五感を駆使して地面のわずかな段差やぬかみを感じることが必要である。またインドネシア・バンガイ諸島の漁民は海に差し入れた樫の音から海底の地形を知る。移動の過程では事物を介して世界の質感を捉えることが不可欠であり、そのとき世界と事物と身体との境界は曖昧になってゆく。

浸透し合う身体・事物・環境

移動を物質的な側面から考えることは、主体的に移動する私たち人間という認識にも問い直しを迫る。たとえば薄い紙切れに過ぎない身分証明書が移動の可否を決定し、季節に応じた動物の移動が人間を付き従わせ、巡礼路には人々を歩かせると同時にそこから逃避させるようなさまざまな事物が溢れているというように、人は自らの意志によって移動するというよりも、周囲を取り巻く事物によって移動させられてゆく。

ここで移動するのは人間や動物だけでは留まらない。ラオスの流れ橋のようにインフラ自体も流されては位置を変え、フィリピンの都市は縦横に走る車両とともに拡張し、ヒマラヤでは大地そのものも揺れ動いている。移動性とは周囲に対する相対的な速度の^{いい}謂に過ぎない（Adey 2006）、あるいは



出漁するサマラ男性（インドネシア・バンガイ諸島、2023年3月、中野真備撮影）

インフラや大地にも身体とは異なったスケールの時間性が織り込まれているのである。

ここで移動を身体と事物と世界の関わり合いとして考えてゆくことは、ボールドウィンらが「人新世のモビリティ anthropocene mobilities」という概念を提示しながら論じていたように（Baldwin et al. 2019）、地球規模で直面する喫緊の課題について考えるための視点ともなる。人間を中心に世界を捉えてきたことが環境問題をはじめとする目下の危機の要因として指摘される現在、物質性という観点から移動を考察することによって、環境中でさまざまな事物と相互に影響を及ぼしながら移動し、かつ移動させられてゆく人間のあり方を捉えることが可能となる。またここには、グローバルな移動のネットワークに接続しながらも破壊的な近代には回収されないオルタナティブな移動のあり方を考察することの可能性も見出せよう。

課題と展望

本稿で報告したのは、共同研究の過程で議論されてきたトピックのあくまでも一部であり、私たちが思考してきたことの一部に留まる。とはいえここまで触れた諸点だけでもさまざまな可能性を秘めており、議論はまだまだ尽くされたいは言い難い。またジェンダーやエネルギー問題など、移動を論ずるにあたって重要であるにもかかわらず十分に深められなかったトピックについても今後の課題としたい。

現在は一区切りとして共同研究全体の成果をまとめるべく論集の刊行作業をおこなっているところである。また今後さらに思考を展開させてゆくための方策もメンバーのあいだで相談している。ここで一つだけ筆者の腹案を示すならば、本研究では移動という「図」に対して「地」を構成していた滞留を前景化するような研究を構想することは興味深いだろう。ある意味ではこの3年半の共同研究期間は、さらに遠くへと旅をするための足場を作るためのものでもあったと考えている。

引用文献

- Adey, P. 2006 If Mobility Is Everything Then It Is Nothing: Towards a Relational Politics of (Im)Mobilities. *Mobilities* 1 (1): 75-94.
- Baldwin, A., C. Fröhlich, and D. Rothe 2019 From Climate Migration to Anthropocene Mobilities: Shifting the Debate. *Mobilities* 14(3): 289-297.